

菊池武重の墓

菊池武重（1307-1341）は、菊池氏の歴史の重要な局面で当主となり、一族最大の繁栄の基礎を築いた。

武重は 1333 年、劇的な状況下で当主となった。数世紀にわたる武家支配の後、朝廷と武家主導の鎌倉幕府の間で内乱が勃発し、菊池氏は朝廷側についた。九州で幕府に打撃を与えようとした武重の父・武時（1292-1333）は、地域の武士団の同盟を結成し、博多（現在の福岡）で幕府の出先機関に攻撃を開始した。しかし、両陣営が激突しようとした矢先、同盟を結んでいた数人の武将が菊池氏を裏切った。

多勢に無勢で死と隣り合わせだった武時は、とにかく攻撃を決行することを決めたが、自分の代わりに一族を再興するために息子を故郷に送った。鎌倉幕府はわずか数ヵ月後に倒され、勝利した後醍醐天皇（1288-1339）は武時の勇気と忠誠を認め、武重を肥後国（現在の熊本県）守護とした。

武重は天皇を守るために京都に留まる一方、菊池氏に関する重要事項の合議による決定など、領内の改革を導入した。この政策は一族の結束を助けた。一方、武重は槍で武装した武士に密集して攻撃させるように一族の戦術の変更を決断し、菊池氏は朝廷の敵との戦いで成功を収めた。

武重は、菊池氏が新しい武家政権である足利幕府の支配に服することを余儀なくされた直後、34歳で病死した。しかし、武重の時代に行われた改革のお陰で、後に弟の武光（1319-1373）が一族を九州で最も強力な武士団へと変貌させることができた。

1816 年に再建された武重の墓は、丘陵の東福寺と菊池川の間、田んぼに囲まれた小さな木立の中にある。墓石の台座は中国の神話では縁起が良いとされていた、亀と蛇の特徴を組み合わせた動物の形をしている。